

# 考える、語り合う No.32

一人一人が輝き、笑顔あふれる学校 まず考える、つぎに語り合う

令和4年2月25日  
長崎市立川原小学校  
学校だより  
校長 寺田 成広

## 三和中学校説明会を開催しました

昨日、三和中学校より塩田教頭先生に来校いただき、学校の教育活動について説明していただきました。美術担当の先生は、昨年度の卒業生が描いた美しいデザイン画を持参されており、子どもたちの興味を高めながら、新しいステージで、これまでと違う学びが広がっていることを伝えてくださいました。

「中学校の先生」ということを意識してか、普段より若干緊張気味の6年生でしたが、終始穏やかな口調でお話を進める先生に徐々に慣れ、日課や教科の学習、部活動等の理解が進んだようです。

ところで、一時「中1ギャップ」というワードが世間で取り上げられました。耳にした方も多いのではないのでしょうか。以下は、「文部科学省 国立教育政策研究所発行の生徒指導リーフ『中1ギャップ』の真実」からの引用です。



「中1ギャップ」の語は、いわゆる「問題行動等調査」の結果を学年別に見ると、小6から中1でいじめや不登校の数が急増するよう見えることから使われ始め、今では小中学校間の接続の問題全般に「便利に」用いられています。しかし、いじめが中1で急増するという当初の認識が正しいのか、不登校の中1での増加にしても「ギャップ」と呼ぶほどの変化なのかについては、慎重であるべきです。なぜなら、必ずしも実態を表現しているとは言い切れないからです。とりわけ、その語感から、中1になる段階で突然何かが起きるかのようなイメージや、学校制度の違いという外的要因が種々の問題の主原因であるかのようなイメージを抱くと、問題の本質や所在を見誤り、間違った対応をしかねません。便利な用語を用いることで、目の前で起きている問題を理解した気になってはなりません。

つまり、システムの変化によって子どもたちが戸惑い、問題行動が現れるというのではなく、小学校から中学校へソフト面における連続が途絶える、または弱くなるのがその原因と言えるのでしょうか。個々の子どもたちのよさや課題を中学校と共有し、つながりのある指導・支援を行うことで「ギャップ」を感じない中学校生活になると考えます。幸いにも本校では、三和中の先生方のご理解やご協力によって、「つながりのある指導・支援」が進んでいると思っています。

## オンライン作文披露会が開催されました

本来は明日、三和公民館で実施予定だった「三和中校区少年の主張発表大会」が、コロナウイルス感染予防のために中止となりました。発表予定だった子どもたちの成果を示す場として、本日「オンライン作文披露会」を開催しました。本校からは、6年松●●さんが代表として発表しました。題名は、「川原小学校6年生として頑張ったことと これからの私」でした。最高学年としてのこの1年を振り返り、1年生のお世話をする中で感じた難しさや充実感、運動会の応援リーダーに勇気を出して立候補し、友達と共にやり遂げた達成感をエピソードを交えて述べました。また、今の生活を支えてくれる伯母さんに心から感謝している気持ちを表し、これらの経験を踏まえて、これからの生活をもっと充実させたい、そしてその姿を亡くなったお母さんに見てほしいという強い思いを発表して終えました。途中でお母様への思いが胸に迫り、涙を流す場面もありましたが、こらえながらの発表は、聞く人の心をいっそう揺り動かしたと思います。すばらしい発表でした!!

